建築する身体

ARCHITECTURAL BODY

人間を超えていくために

河本英夫訳

この本のタイトルをどうしようかとあれこれ考えつくしたあとに、私たちは正しいタイトルにいたりついたのだろうか。
「建築する身体とはなにか」。この問いについていくぶんか理解した読者だけが、正しいタイトルに到達できるのだろうか。
このタイトルに代えて、なお別の決定的タイトルがあるとしたら、それはいったいなんなのか。
「生命の構築」こそ、それである。
だが私たちの作業は、一から十まで生命を構築するというより、生命を作り変え、再度かたちをあたえることにかかわっているのだから、本のタイトルとしては生命の構築を採用できないことになる。
生命の構築は、私たちの作業と、自己組織化、オートポイエーシス、人工生命、意識研究といった領域でおこなわれた作業とのつながりを示唆している。そのためにも生命の構築という語は、望ましいものに思えた。
向かっている方向は、同じである。私たちは、これらの作業と同じ道を進んでいる。だがそうだとしても、私たちはまったく異なったことをおこないつづけている。
この違いをどう言い表したら、言い表したことになるのだろう。
これを表現するために、機はいまだ熟していないのである。

ARAKAWA AND MADELINE GINS

荒川修作＋マドリン・ギンズ

建築する身体

ARCHITECTURAL BODY

人間を超えていくために

ARAKAWA AND MADELINE GINS
荒川修作＋マドリン・ギンズ

江苏工业学院图书馆
藏书章

河本英夫 訳

春秋社

建築する身体

人間を超えていくために

二〇〇四年九月二〇日　初版第一刷発行
二〇〇八年四月一〇日　新版第一刷発行

著者　荒川修作＋マドリン・ギンズ
訳者　河本英夫
発行者　神田明
発行所　株式会社 春秋社
〒一〇一－〇〇二一　東京都千代田区外神田二－一八－六
電話　〇三－三二五五－九六一一（営業）
〇三－三二五五－九六一四（編集）
振替　00180－6－24861
http://www.shunjusha.co.jp/

装幀　荒川修作＋HOLON
本文設計　HOLON
印刷・製本　凸版印刷株式会社

©Hideo Kawamoto, Printed in Japan 2008
ISBN978－4－393－95505－5
定価は表紙に表示してあります

フランス語版

序文

ジャン＝ジャック・ルセルクル［塚原史 訳］

あなたがたがこれから読もうとしている書物は、すくなくとも、習慣的な読書とは異質な体験を提供してくれるという利点をもっている。この書物はたしかに、どんな読者でも無関心ではいられないような独創的な命題を提案している。著者たちは、私たちの運命が反転可能であり、死すべきものとしての私たちの条件が、避けられないものでも、敵意に満ちた宿命によって救いようもなく押しつけられたものでもないのだと主張する。要するに、この問題にどのように対応すべきかを心得てさえいれば、私たちが死ぬ必要など、まったくありはしないのだ。すばらしい知らせだ。その秘訣を見つけるために、私は勢いよくページを繰って見たくなった。

とはいえ、しばらく思いをめぐらせると、この良い知らせがそれほど新しいものではないことに気づかされる。人類の全歴史は、死すべき運命という限界を克服し、私たちをあの世から隔てる境界を乗り越えるためのさまざまな試みにほかならないと考えられるだろう。これらの試みは、主として宗教と呼ばれるが、それはまた青銅より長持ちする作品を

アラカワ／マドリン・ギンズ『建築する身体』（モニク・シャサニョルによるフランス語訳、「打ち手なき槌」叢書／マニュシウス出版、2005年9月）

つくりだす芸術でもあり、あるいはもっと単純に〔子孫を残すための〕生殖とも呼ばれる。だが、こうした試みは、すべてひとつの共通点をもち、それはひとつの限界でもある。なぜなら、それらは間接的であるか（生殖行為において、生き残るのは私の遺伝子であり、私自身ではない）、あるいは隠喩的であるからだ（青銅は永遠ではないし、シェリーのソネットのオジマンディアス〔エジプト王ラムセス二世のギリシア名で、この詩（1818）の表題でもある〕の彫像は「胴体のない、二本の巨大な石の脚」しか残らず、その周囲には、見わたすかぎり砂漠がひろがっていた）。結局、こうした試みは、そのなかではいちばん本気な宗教も含めて、避けられない私の死を避けるという点では、それほど本気ではなかったことになる。私は自分が死ぬことを知っているし、この事実は、それが〔死によって〕あきらかにされるのをただ待っているだけなのだから。

それでは、誰かが――たとえば、本書の著者たちが――本気で、つまり直接的に、文字どおり、隠喩なしに、超越性にも頼らずに、私たちの運命が反転可能だと主張するなら、いったい何が起こるのだろうか？　答えを待つまでもなく、彼らは狂人かふざけ者、あるいは狂信家か気取り屋と見なされるだろう。もちろん、彼らが、これら二つの分類をひとまとめにする範疇である哲学者でなければの話だが。ところが、この書物が現に提案している答えは、そのようなものではない。彼らは建築家なのだ（そして、彼ら独自のスタイルで、哲学者でも芸術家でもある）。

というのも、ギンズとアラカワは、前者が詩人で、後者が著名な画家であるとしても、そして二人とも、とりわけ創意あふれる建築家であるとしても、じつは哲学者なのだ。人間の運命の反転可能性を宣言して、彼らは常識との断絶という根本的な哲学的行為を成し

ジャン＝ジャック・ルセルクル（Jean-Jacques Lecercle）
カーディフ大学教授を経て、現在パリ第10大学（ナンテール）英米研究科教授（言語学、哲学）。主著に『言語の暴力』（PUF, 1996）、『フランケンシュタイン、神話と哲学』（PUF, 1997）、『記号の支配』（共著Seuil, 2002）、『ドゥルーズと言語』（Palgrave, 2002）、『言語のマルクス主義哲学』（PUF, 2004）など。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

遂げる。過去を想起するなら、一方に洞窟が、他方には悪霊が必要だった。三番目には、可能な限りのさまざまな世界の果てしないピラミッドが求められた。神は、知恵を用いてその頂上を〔わがものとして〕実現することを選んだのである。そして、最後の四番目には、私たちが知っているとおりの世界の再構築を正当化するために、エポケー〔判断停止〕という甘美な名で呼ばれる〔過去の〕過激で根源的な棚上げが必要とされた。それが常識的な理解を超え、そんな理解を脅かす操作だったことはあきらかだ。ギンズとアラカワの創出的行為もこれと似ている。真実を構築するために、思い切って、真実らしくないものに自身を定着させるのだ。

構築という隠喩は、熟慮の上のことだ。なぜなら、ギンズとアラカワはただ哲学者であるばかりか、何よりも建築家だからである。二人の創出的で想像力ゆたかな跳躍は、フッサール的エポケー〔新田義弘によれば「自然的態度の根底に働くもっとも根強い習性、すなわち世界の存在への暗黙の確信である一般定立を停止」すること〕と同じ次元のもので、そこでは、身体と世界のあいだの関係を新たな手間をかけて思考することが問題となる。この関係についての私たちの見方を鈍重にしたり、歪めたりするいっさいの先入観なしに、そうするのだ。この新しい視点から、新しいオブジェ〔物＝対象〕が立ち現れ、それが本書の表題となる。建築的〔建築する〕身体である。

このオブジェはひとつの概念であり、念入りに構築されて一連の諸概念のなかに組みこまれ、それらとともにシステムを構成する。そして、あたかもアーチの頂点に置かれる要石のように、システムに堅固さと一貫性をあたえるのだ。これらの諸概念は常識からの移動によって獲得されるので、必然的に風変わりな名前を受け取る。なぜなら、ここでは日

常的言語の罠を避けなくてはならないからである。日常的言語とは、ドゥルーズなら言いそうなことだが、良識（その方向は決定的に固定され、その意味論的創造性は硬直している）と常識（それは思考する個人に共同体の既製服的な思考〔プレタパンセ（プレタポルテにかけた造語）〕を押しつける）を媒介する言語である。ギンズとアラカワには良識も常識も見出せないが、このことは彼らへの最高の哲学的称賛として理解されなくてはならない。

しかし、〔『建築する身体』では〕じつにエキゾティックで、とても魅力的な被造物〔「有機体-人間」など〕に出会うだろうが、真理に関するそれらの貢献は高度なものだ。どの被造物も、良識と常識の観念からの移動の実例となっている。

最初の移動は、主体の概念を有機体-人間（organism that persons〔原書ではorganism person とも表記〕）によって置き換えることである。この場合には、近代性（モデルニテ）の中心である哲学的ふるまいに関係がある。主体の概念を、それがすくなくともデカルト以来占めてきた位置から移動させるふるまいだ。そして、このことは二つのやり方でなされる。ひとつは、認識と意志と責任の中心であり、その環境から切り離すことができ、環境に働きかける個人的主体に関して。もうひとつは、デカルト的〔心身〕二元論が提起するあらゆる問題をともなって、身体から切り離せる精神としての、身体から離れた主体に関して。つまり、有機体-人間（別の哲学体系であれば、現存在（ダーザイン〔門脇俊介によれば、「ハイデガーの存在論で人間を指す語」であり「何らかの仕方で存在了解をもち、しかも存在の意味を問う主体である人間存在を、〈神の似姿〉や〈理性的動物〉といった従来の人間観から切り離して、純粋に存在論の地平から主題化するために用いられる」〕）と呼べるかもしれない。その内容はまったく異なるが、哲学的なふるまいは同一だ）は、厳密な意味で個人的でも、身体から切り離されてもいない。それは

環境（自然環境だけでなく、建築環境でもある）からも、身体からも切り離せないものであり、環境と身体とともに、環境と身体によって構成される。だから、有機体－人間はまず環境－内－身体であり、そのあとでだけ、人間的主体として構成されるが、その主体性と人間性はこの相互作用の源泉ではなくて、結果である。あるいはさらに、身体が人間〔人〕になるのは建築的身体のなかでのことである。英語では《organism that persons》と言う。そのフランス語の訳〔organisme qui personne（邦訳では「有機体－人間」）〕は、この表現によってあらわされたこと、つまり、ひとつの「有機体」からはじまる前進運動を保存すると同時に、不可避的に失っている。「有機体」とは生命でも、物質でも、半物質でもよいが、あらゆる存在を指示する語であり、まだ人間〔humain〕ではなく（《that》という関係代名詞は人間と非人間のあいだの対立を中立化するが、フランス語の《qui》はどちらかの選択を迫る〔quiは疑問代名詞では人間を指しwhoに近い〕）、英語でもフランス語でも、転換の修辞的操作によって得られ、新造語を構成する動詞〔persons/personne〕によって表現される過程をつうじて人間〔person/personne（人）〕となる〔この意味では、逐語的に邦訳すれば「人間（人）と成りゆく有機体」〕。なぜなら、人間〔人〕とは、ギンズとアラカワにとって、与えられたものや創造されたものではなくてひとつの過程の結果であり、過程そのものだからである。人間〔人〕が（良識や常識のように）名詞ではなくて動詞であらわされているのは、そのためだ。つまり、「人間〔人〕たちが存在する（il y des personnes）」のではなくて、（「それが語る〔そのとおりだ（ça parle）〕」と言うように）「それが人間〔人〕になる（ça personne）」のである。フランス語訳が不可避的に何かを失っているとしても、逆に、思いがけないとはいえ、好運なやりかたでつけ加えたものもある。〔フランス語訳では〕私たちは誰でもなく、また誰に

も生まれつかずに〔on n' est (on ne nait) personne (personneは否定のneとともに用いられると「誰も…ない」という強い否定の意味になる)〕、ひとりの人間〔人〕になるのだ〔on devient une personne〕。

したがって、最初の移動からもたらされる第二の移動をつうじて、私たちは世界と向かい合う個人の独立と、精神と肉体の分離からではなく、両者のあいだの接触（コンタクト）から出発するだろう。第二の概念である「接触の場所（ランディング・サイト〔「降り立つ場」〕の重要性は、ここから生じる。英語は、ことさらのように、月面に着陸する宇宙船のイメージを呼び起こす。有機体－人間〔人間（人）と成りゆく有機体〕の概念構築を主導していた脱習慣化と同じ戦略が、そこにはある。つまり、世界と私とのあいだの相互作用という、もっとも慣れ親しんできた知覚、もっとも日常的なふるまい、もっともささいな運動のすべてを、火星着陸のようなやり方で思考する必要があるのだ。自分の日々の生活、世界との、そのもっとも平板な関係を、まるでそれが探検か発見であるかのように生きる必要があるのだ。私がこの文章を書いている書斎が宇宙船で、窓から見える木々がジャングルであるかのようにふるまう必要があるのだ。そして、もちろん、移動はさらに遠くまで進んでゆく。常識の言語は、観照の行為としてこの過程を記述するよう、私を導いた。部屋の窓から、私は異界を見ているわけだ。けれども、〔習慣的世界と〕異質なのは、私が眼にする光景ではなくて、接触のほうである。そして、この接触の場所〔降り立つ場〕、この宇宙船とは、私自身であり、私の身体なのである。だから、ただこの世界を変えればよいのではなくて、世界と私との関係を変えなくてはならない。つまり、私の知覚が、私の環境世界の探検であり構築となるようにする必要があるのだ。そのとき、なぜ私の身体

が建築的〔建築する〕身体であるのかが、逆説としてでなく理解されるだろう。というのも、身体は有機体-人間から切り離されてはいないし、切り離し可能でもないからだ。このことは、知覚の現象学よりは（ギンズとアラカワの哲学的ふるまいがメルロ＝ポンティのそれといくらか類似しているとはいえ）、むしろさまざまな接触の場所の分類学に関わっている。新たなイメージと次元をつくりだす知覚の場所をつうじて、有機体-人間はその環境世界を探検し、この世界を構築してわがものとするのである。

この有機体-人間（それが主体に取って代わるもの、ハイデガー的ダーザインと等しいものだったことは、すでに見た）は、したがって、その環境世界のなかで、この世界をつうじて人と成りゆく有機体である。このことから、有機体-人間を単なる概念ではなくて、概念としての登場者、ひと言で言えば「人間カタツムリ（humansnail）」にするという詩的隠喩（メタファー）が生じる。この英語を、フランス語訳者は新造語《escarghomme》〔escargot（カタツムリ）とhomme（人間）を一語に結合〕によってみごとに表現している。なぜなら、本書の著者たちが引用しているポンジュの詩〔第3章に引用された「カタツムリ」〕が、もうひとつの詩篇〔ギンズとアラカワの「人間カタツムリ」〕を生み出し、そこでは、カタツムリが人間カタツムリとなって、ギンズとアラカワの建築のプログラム（仮説としての建築）が、詩的に思考されているからである。私のような散文的哲学者にとって、カタツムリは、人と成りゆく有機体の隠喩として、それが適切で有効なやり方で、たしかに抽象的な抽象化〔「有機体-人間」〕を具体的に表現しているという事実のほかに、二つの利点をもっている。カタツムリは彼の家あるいは世界を背負っているので、その環境世界を抽象して思考されることはできない。そして、そのためらいがちな、だが頑固な歩みの過程で、カタツムリは世

界を手探りで〔試行的に〕探索するのだ。私たちの著者による建築の定義はここから生まれるが、それは人間カタツムリにふさわしいものである。すなわち〔建築とは〕「場所をしっかりと捉えることへと向かう試行的な構築（a tentative constructing toward a holding in place／l' elaboration tatonnante d' une saisie du monde）」〔邦訳では「場所を占めつつ向かう不確かな構築」だが、tentativeはフランス語訳でtatonnanteとなっているように、「試行錯誤（手探り）的」の語意があり「不確か」とは語感が異なる。またin placeにはThe mortar keeps the bricks in place.（モルタルがレンガをがっちりと固定している。*Randomhouse*）の用例がある〕であり、フランス語訳者が第3章の冒頭でもっと優雅な言い方をしているように、世界を捉えること〔une saisie du monde〕のための試行的手探りの念入りな仕上げのことでもある。なぜなら、ひとつの世界は接触の場所の拡散をつうじて構築され、仕上げられるからだ。世界は、たしかに捉えられる。つまり、習慣的な哲学的隠喩に忠実な言い方をすれば、活発で切れ目のない過程のなかで（もし巨人アトラスが膝を掻いたら、地球は崩れ落ちてしまう）世界はその位置を捉え、みずからを手探りで探索するのである。ここで、隠喩はキーツ的になる。というのも、ギンズとアラカワのカタツムリはポンジュのカタツムリばかりか、キーツのカタツムリでもあるからだ。キーツはよく知られた手紙のなかで、詩人の、カタツムリの角による知覚《snailhorn perception》について述べている〔画家のハイドン宛の181 8年4月8日付の手紙（「美の、ふるえるように繊細な、カタツムリの角の知覚」とある）〕。詩人のギンズとアラカワにとって、すべての人間存在、すべての有機体－人間は、キーツの場合の詩人のように、手探りで世界を探索する。この手探りは、単に「まるで……のような」のたぐいの虚構ではない。手探りの探索のやり方が「……だとしたら、いったい何なのだろ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

うか（what if）」だ。この感嘆表現のなかで、手探り（《tentativeness》〔フランス語ではtatonnement〕）は、フランス語の意味での「試み」つまり試行錯誤となる。それは、実験の切れ目ない過程だ。建築の時間は、と著者たちは言う、モニュメントと伝統の過去でもなければ、「未来主義的（フュチュリスト）」と呼ばれる建築の未来でもない。それは現在の時間だが、どんな現在でもよいわけではなくて、実験の過程が現実化する時点でとらえられた現在であり、言語学者が未完了相〔時間軸上のある点で未完了の時制で、過去・現在・未来を問わない〕と呼ぶものの現在、手探りの仕上げのための現在である。つまり、未来をわがものとすることを可能にする現在なのだ。

このようにして試行的に探り出された世界は（著者たちにならって新造語の使用を許してもらえるなら）、ひとつの名前を受け取る。バイオスクリーヴ〔「生の切り閉じ」（『建築する身体』本文と訳注参照）〕、つまりこの試行的手探りが実行される環境である。ここでもまた、移動が課題となる。環境という共通の、したがってあいまいな用語に、もっと明確な意味を与えなくてはならない。別の哲学的言語では、生活世界（レーヴェンスヴェルト〔フッサールの用語で、鷲田清一によれば「あらゆる意味形成と存在妥当の根源的な地盤として、科学的な世界理解に先立っていつもすでに自明なものとして与えられている世界」〕）と呼ばれてもよかっただろう。今日では、生命体全体の連帯を強調するために、それは一般的にはバイオスフィア〔地球の生命圏〕と呼ばれるようだ。この語には、世界をまとまりとして取り扱い、個人よりは全体性から世界を構想するという利点がある。しかし、ギンズとアラカワは、こうしたふつうの用語では満足しないから、彼らはたしかに新造語を必要としたのだが、それをフランス語訳者は、賢くも《bioscleave》という英語のまま採用することにした。というのも、こ

の英語の用語は、〔あえて原語を残した〕フランス語訳に不可避的に現れているように、言葉遊びの場となっているからだ。《cleave》〔「切り裂く」(split) と「貼りつく」(stick) の両義〕という動詞は、言語進化のためらいから本来は別々の二つの動詞がひとつになったのだが、対立する二つの意味を一語で集中的に表現する撞着語法となっている点で、フロイトを魅惑した語のひとつなのである〔フロイトは言語学者カール・アベルの論文（1884）に触発されて『原始言語の反対の意味』（1910）を執筆し、『精神分析入門』（1917）でも「夢の作業」に関してこのテーマを取り上げているが、そこにはこの語の例が出てくる〕。《cleave》は文字どおり「貼りつく」という語義から「執着する」の意をもつが、同時に文字どおり「切断する」という語義から「切り離す」の意にもなる。したがって、「バイオスクリーヴ」とは、殻がカタツムリから切り離せないように、建築的〔建築する〕身体から切り離せないもののことであり、建築的〔建築する〕身体はバイオスクリーヴのなかに立ち現れ、カタツムリが殻をわがものとするように、それをわがものとし、ひとつの建築を創造することになる。というのも、すこし考えてみれば、「建築的〔建築する〕身体」という用語自体が逆説的なのである。この語は、環境を指示すると同時に、有機体-人間〔人間（人）と成りゆく有機体〕を指示している。つまり、身体が、その接触の場所〔降り立つ場〕を拡散して自分の位置をたしかめるための建築を指示すると同時に、この環境との相互作用のなかで構築される個人を指示している。

こうした概念構築から、ギンズとアラカワは二つの結論を引き出す。ひとつ目は、有機体-人間とバイオスクリーヴとの相互作用が、手続き〔手順〕としての建築をつうじてなされるということだ。なぜなら、たとえ私たちが気づいていないとしても、知覚し、行動

し、食べるといったことのすべてが一連の手続きなのだから。一軒の家を建てることは、私たちの毎日の生活をつくっている、階段状のさまざまな手続きの論理的連続である。それも、全面的に意識的で、はるかに包括的な手続きにほかならない。こうした状況からは、じつは、建築の実践以上のものが引き出せるだろう。人間の世界との関係に関する仮説（本書第5章〔「手続きとしての建築」〕には、三つの仮説が提示されている）と、著者たちが「危機の倫理」と呼ぶものである。二つ目の結論は、人間が建築的動物であるということだ。つまり、私がそうであるような蜘蛛（私の立方体の中心に座って、繭のように私の書物に取り囲まれて、私は私の言葉という糸で巣を編む）から、世界を手探りし、自分の周囲に世界を構築してもち運ぶ人間カタツムリへと移行しなくてはならない。要するに、花壇を探検してその形状をたどる、ヴァージニア・ウルフの小説「キュー・ガーデン」〔1919〕のカタツムリにならなくてはならない。そこでは、彼が花壇の横断に成功するだろうかと、人びとが訝しがるほどだ。

この視点から、第3章〔「仮説としての建築」〕の、ゴミの山（ヒープ）の家の記憶に残る描写を読むことができるだろうし、そこでは、卵を料理するために、いったいどうすればよいのかと自問せずにはいられないだろう。これは、ギンズとアラカワが優雅かつ無造作なやり方で解決したか、あるいは退けた問題でもある〔「料理するには、何の問題もありません」とギンズは言う（邦訳、80p）〕。二人が建築的創意を欠いているなどと、誰も非難できはしない。彼らの建築計画の大判のカタログ〔グッゲンハイム美術館展カタログ《Reversible Destiny》（1997）など〕の各ページが、そのことを証明している。

会話形式で劇化されたゴミの山の家の描写で、私を驚かせることがある。建築に関する

テクストからテクストとしての建築へと移行する考察の形態だ。建築には、一種の言語つまり仲間うちの隠語（ジャルゴン）が存在することは、誰にも疑いようがないし、隠喩としては、建築がひとつの言語であることも周知の事実だ（結局、建物とは、ある意味で文章のようなものではないだろうか？――都市を通り抜けることは記号群を解読することなのだから）。けれども、ギンズとアラカワはさらに先に進む。哲学者ジル・ドゥルーズの指示にしたがって、彼らは隠喩を文字どおりに解釈する。建築とは言語そのものであり、語は建物に先立つ〔建築の〕要素である。文同様、建物は構成単位によって、範列〔置き換え可能な語群（パラダイム）〕を構成する置き換え可能な単位と、連辞（シンタグム）を構成する組み合わせの連鎖によって構築される。家や街や公園を構築することは、だから、文章（テクスト）を書くことなのだ。自然はひとつの偉大な書物だが、それは神が自然の規範（コード）を定めて、その文面を書きこんだという意味ではなくて、人間、あの有機体－人間〔人間（人）と成りゆく有機体〕、あの建築的〔建築する〕身体がこの書物を書いている（つまり、言説として、言説によって自己を構築しながら世界を構築する）という意味である。こうして、なぜ建築が手続き的でなくてはならないのかが理解されるだろう。言語学者が言表（エノンセ）の過程と呼ぶものとおなじで、手続きとしての建築は時間的（手続きとしての建築は過程としての時間でもあり、そこには固有の時間が存在する）、空間的（これは言うまでもないだろう）な位置決定に取りくむのだ。したがって、名ばかりの、モニュメント的で静止的な建築には、位置決定と過程と、連辞の連鎖と範列の潜在力からなる言葉としての建築、ギンズとアラカワの建築を対置することができるだろう。

おそらく、建築とテクストとのあいだのこの内省的な響きあいから、本書のテクストが

単なる建築概論でも哲学的エノセーでもなく、ひとつのテクスト（文学者たちかこの語にこめた高貴な意味でのテクスト）であるという状況か生している。そして、それが英語で書かれたことから、翻訳の問題が提起される。というのも、〔フランス語訳の〕訳者は、潜在的に矛盾した二つの命題を和解させなくてはならなかったからだ。テクストの哲学的重要性をきわだたせる必要（そこで提案されているのは、自我／エゴと世界と身体の概念にほかならないのだから）、つまり説明の明快さを強調する必要と、テクストの詩的性格を尊重する必要との和解である。なぜなら、ギンズとアラカワはひとつの文体をもっているので、試行的手探りは、テクストの概念的内容にかぎったことてはないからた。翻訳〔フランス語訳〕は、二つの命題の和解に成功したように、私には思える。もっとも、手探りは（英仏の言語と文化の差異かそこに見て取れる）、英語のテクストのほうか目につくようだが。重要なのは、まさにそのことた。原文同様、翻訳は建築の思想に敬意を表している（もちろん、建築家たちもつねにそうしてきた）。本書のテクストには、トラクタトゥス〔ラテン語で「論考」の意（ヴィトゲンシュタインの『論理哲学論考（Tractatus Logico Philosophicus）』（1921）か想起される）〕として、哲学と思想の道のりを概観するという一面かある。

だが、それたけてはない。私は、言葉遊びを繰り返すという、本書のたくいまれな性格に立ちもとりたい。そこには、たしかに、建築に関する事例〔症例〕の履歴研究に属するようなページが見出される。ゴミの山の家の計画か、すでに見たとおり、第3章で紹介されているが、図面もスケノチもなく会話形式て進められるので、私たちは科学者から哲学者や文学者へと移行せずにはいられない。ポンジュの一篇の詩〔「カタツムリ」〕が、論証の構成部分として引用されているし、その数ページ先て書き直されているほどだ〔「人間カ

タツムリ」はポンジュの詩の引用から始まる〕――私たちの建築家は、だから詩人なのである。そのことは、テクストの隠喩的ゆたかさからも理解される。さまざまな概念が精彩のある名前を受け取るが、それらはそのままで詩的だと形容できるだろう。あの《試行的なものを揺り篭で育てるような手続き《tentativeness cradling procedures》〔邦訳では「一時的－揺り篭的手続き」だが、tentativenessは形容詞ではないので、あえてこう訳した。フランス語訳では《procedures d' encouragement du tatonnement》で「手探りをはげます手続き」となり「揺り篭」のイメージが消えている〕もそうだ（フランス語訳は、「揺り篭で育てる」イメージを失わざるを得なかった）。こうした詩的性格は、第6章で「註」（「建築する身体のための諸註」）のかたちを取ったアフォリズムへの嗜好からも読み取れる。だが、逆に、そうした文学的言葉遊びから離れた、哲学的文体に特徴的な断定的判断も見出される。たとえば、第8章には、「有機体－人間は、一つの世界があることが好きであり、それというのも一つの世界は、ある時点で一つの人間であることを容易にしてくれるからである」〔邦訳、171p〕とあるが、この箇所は初期ヴィトゲンシュタインの文体の、アイロニーで新たに色づけされたもじりとして読むこともできそうだ（『論考』の、有名な最初の命題〔「世界とは実情であることがらのすべてである」〕がまさにパロディ化されている）。そして、哲学のなかに入りこんだ以上、私たちは、一度ならず、思考実験という哲学的ジャンルに出会うことになる。そこでは、理論がもっとも創造的な建築的想像力と合流するのだ。本書の驚くべきページについても、おなじことが言える。そこでは、著者たちは、私たちがこれから読もうとしている彼らの書物をひとつの建築として扱うよう、ページのスケールを想像力によって変えて、テクストの各行をへだてる空白〔ブランク〕を認識し、テクストを迷宮に変換するよう、はげましてくれるのだが、こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com